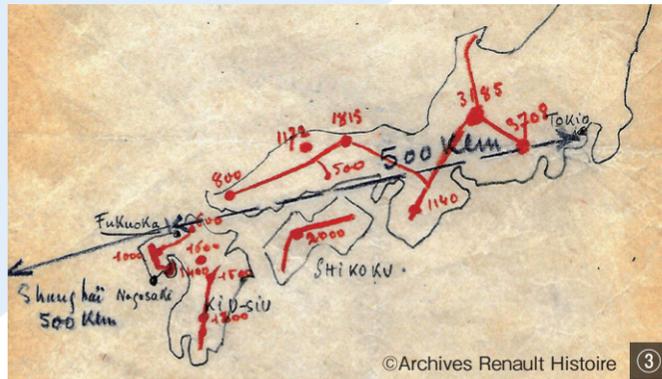


# 1936 PARIS-TOKYO フランスと日本をつないだジャッピーの挑戦



写真提供 日本航空協会 朝日新聞社 毎日新聞社 Archives Renault Histoire 他



1936年11月15日夜（現地時間）、フランスの飛行士アンドレ・ジャッピー（32歳）はパリー東京間を100時間内に飛ぶ懸賞飛行レースに挑戦するため、最新鋭のコードロン・シムーンに乗り、パリのル・ブルジェ飛行場を単独で飛び立った。ルノー製220馬力エンジン装備の単発機、最大速度310km/h、4人乗りを1人乗りで改造し、機体を赤く塗った。ダマスカス、カラチ、アラハバード（インド北部）、ハノイで給油して香港に無事着陸、ここまでの飛行時間は56時間でゴール目だった（パリーハノイ51時間は当時の記録更新）。

天候の回復を待って翌19日朝、香港を離陸したが、強風に悩まされ、同日夕、燃料補給のため福岡に向かう途中で脊振山に衝突。ジャッピーによれば、激しい突風に襲われて機内の金具に頭をぶつけて一瞬気を失い、機体をあげようとしたが間に合わなかったという。

脊振山の村民が夜8時半ごろ、ジャッピーを発見し、急ごしらえの担架に乗せて診療所に運び、翌日福岡の九州大学病院に入院させた。左太腿部骨折で全治2か月の重傷。ジャッピー機遭難は当時の大ニュースで、ジャ

ッピーは一躍、時の人だった。ジャッピーは翌年2月6日に退院後も、大分県別府の九大温泉治療学研究所で療養を続けた。3月19日に同研究所を後にして脊振村を再訪し、村人たちに感謝の気持ちを伝えた。23日に毎日新聞社機で大阪に移動し、翌日列車で東京入り。滞在中は歓迎会や講演会、ラジオの国際放送出演で忙しく、帝国飛行協会からは緑色有功章が贈られた。また、朝日新聞社を訪問、東京一ロンドンの亜欧連絡飛行に挑戦する「神風」号の飯沼正明（26歳）、塚越賢爾飛行士（38歳）と対談し、二人の挑戦にエールを送った。

30日に東京駅から神戸に向かい、翌朝フランス郵船に乗船。サイゴン（現ホーチミン市）から空路に切り替え、エールフランス定期便で5か月ぶりにパリに戻った（4月17日）。フランス航空年鑑によると、パリー東京懸賞飛行は4組が5回挑戦したが、いずれも失敗。トップを切って挑戦したジャッピーと、マルセル・ドレー、ミケレッティ組（再挑戦で高知に不時着）が日本国内に到達した。

（全体構成 柳沢光二）

- ① アンドレ・ジャッピーと愛機コードロン・シムーン
- ② パリー東京の懸賞飛行ルート。赤い印が遭難地点
- ③ ジャッピー本人が書いた東京への飛行ルート
- ④ 機体が散乱する遭難現場
- ⑤ ジャッピーを搬送する警防団員
- ⑥ 見舞いに訪れた女性たちと病院で記念撮影
- ⑦ 列車で東京駅に着いたジャッピー
- ⑧ 歓迎の人に囲まれるジャッピー
- ⑨ 帝国飛行協会で緑色有功賞の受賞。右は田中館愛橋副会長
- ⑩ 朝日新聞社で「神風」号の飯沼、塚越飛行士と対談
- ⑪ ル・ブルジェ飛行場に降り立つジャッピー。多くの関係者が出迎えた